

連載700回達成 「本間宗究」改め

本間 裕 テンダネス代表取締役について聞く

信用乗数にも危険な兆候

デリバティブ大膨張で歪み生じる



1999年9月から本紙で15年を超えるロングラン連載を続けている「本間宗究」氏こと、テンダネス・本間裕代表取締役(写真)。「相場を斬る」「相場の醍醐味」の通譯で連載は700回に達した。2000年の「バブル崩壊」や、06年に端を発する金融大混乱を前に警鐘を鳴らしたことなどから固定ファンも数多い。今回は読者の要望に応え、紙面上では初めて素顔を公開。これまでの経緯や、現在の経済、相場情勢をどうみているかなどについて話を聞いた。

「そもそも、ベンチャー景から聞きたい。――「本間宗究」としての背景」「江戸時代の伝説的相場師として広く知られる本間宗久を、もじって付けたもの。最大の失敗を繰返した。バブル崩壊を認めず、投機的な売買を勧めた海外顧客に江戸へ出て、米相場を越えて追い証(追加保証金)で大失敗。請求にも行った。その後、

破産した経緯がある。その後、酒田(山形県)に戻って暦を研究したことで、百戦百勝の大相場師となった。実は私も、証券マン時代の1990年に「人生最大の失敗を繰返した。バブル崩壊を認めず、投機的な売買を勧めた海外顧客に江戸へ出て、米相場を越えて追い証(追加保証金)で大失敗。請求にも行った。その後、

本格的に暦(サイクル論)の研究を始めたことなど共通点は多いと感じている。同じ本間姓だが、姻戚関係などはないのか。――「これは後になって知ったことだが、本間家の源流は現在の厚木(神奈川県)にあった。鎌倉幕府と朝廷が対立した1192年1年の『承久の変』を経て、順徳上皇が佐渡に流された際、お目付け役のような形で佐渡に渡り、その後、直江兼続に討たれるまで、同地は本間一族の支配が続いた。後に酒田に移った一族の中から宗久氏が生まれたわけだ

から、考えよ(き)によつては、佐渡で生まれ育った私の方が「本家筋」と言えるのかもしれない。――「1990年の「大失敗前後」と言われたか。――「83年に米国でMBA経営学修士を取得して意気揚々と帰国したものだったが、結局、こうした理論は未来予測には全く役に立たなかった。90年のバブル崩壊は、ちょうど60年前と同じ経過をたどった。経済学は頼みならず、暦とともに、マネー理論を独学で徹底的に研究した。――「マネー理論とは。――「学問的研究としては、あくまでも中央銀行や市中

銀行を通じた信用創造が中心で、各種デリバティブなどの市場による信用創造は軽視されてきたが、この部分にも光を当てたものかな。――「それはなぜか。――「各種デリバティブが02年の東京(1京市は1兆円の1方色)から07年には8京市規模に大膨張し、さまざまな面で歪(ゆが)みが生じたためだ。それも、さすがに限界を迎えつつある。日本ではほとんど報じられなかったが、昨年10月7日の英FT紙にデリバティブの変更に報じられた。巨大な金融機関に破綻(はたん)が生じた場合の余波を極力抑えようとするものだ。リーマン・ショックをはるかに上回る金融の大地震が遠からず訪れることを予見したものだ(う)」。――「これから、いかに対応すべきだろうか。――「インフレの大津波を前に、まずは一家に1つの金を持つことをお勧めしておきたい(A)」。――「本間裕氏の著書『金融大地震とインフレの大津波』のブックレビューを26日付紙面に掲載します。著書プレゼント企画もあります。

一家に1キの金を

「インフレの大津波を前に、まずは一家に1つの金を持つことをお勧めしておきたい(A)」。――「本間裕氏の著書『金融大地震とインフレの大津波』のブックレビューを26日付紙面に掲載します。著書プレゼント企画もあります。